

# 大学が消える街

## 箱崎は今

◆ 7

「早く鬼ごっこしようよ」  
午後三時を過ぎると、鮮魚店や青果店が軒を連ねる箱崎商店街(福岡市東区)に子どもたちの歓声が響き始める。にぎわいの中心は、囲碁やけん玉も備える子どもたちのたまり場。空き店舗を利用して九州大学の学生が運営する「きんしゃい きゃんぱす(きんきゃん)」だ。

平日の夕方、心理学や教育学専攻の学生たちが姿を見せ、近くの箱崎小学校の児童らと遊び、悩みごとの相談に乗る。素顔の子どもから、教わることは多い。

教育学部四年の鬼塚史織さん(三三)は「子どもにこびることなく、同じ目線でとけ込めるようになった」。

# 学外の「キャンパス」

吉田明日香さん(三三)は「教育実習ではつかめなかった子どもたちのありのままの姿に触れられる」と、きんきゃんの効用を説明する。

◇ ◇

## 触れ合い

もともと「地域に開かれた研究室」を目指し、九大が学生のために開設したきん

んきゃん。四年前の夏、かありましたか」。商店街外き水販売をきっかけに子どもたちが集まるようになった。学生や店主ら大人との密な触れ合いは、子どもにとっても社会性をはぐくむ機会になっている。

しかし、きんきゃんを取り巻く環境は穏やかではないう。再開発の影響で過去二回、転居を余儀なくされた。

今後、九大箱崎キャンパスの移転が進めば、学生らの足が遠のく懸念もある。きんきゃん代表の大学院生山下智也さん(三三)は、大学と街が共生する意義を重くみて「子どもが集まる限り続けたい」と話す。

「お米の売れ筋に変化は必要がある」と訴えた。

吉岡秀和さん(三三)は「地元商店街で学んだことを将来の研究に生かしたい」と研究発表後も、同店に通う。箱崎の街は、九大生にとつて最も身近な「実社会」であり、大学の外のもう一つのキャンパスでもある。



箱崎商店街の社家町米穀店で、店主の原田さん(右)と農業について語り合う九大生たち